

## 二国間交流事業 セミナー報告書

令和4年10月7日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]  
京都大学・大学院医学研究科  
[職・氏名]  
教授・竹内理  
[課題番号]  
JPJSBP220219903

1. 事業名 相手国: ドイツ (振興会対応機関: OP) とのセミナー

2. セミナー名

(和文) 日独免疫ワークショップ

(英文) Japanese-German Immunology Workshop

3. 開催期間 2022年9月11日～2022年9月13日 (3日間)

4. 開催地(都市名)

ゴスラー(Goslar)

5. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Helmholtz Centre for Infection Research・Professor・Jochen Huehn

6. 委託費総額(返還額を除く) 1,900,000 円

7. セミナー参加者数(代表者を含む)

	参加者数	うち、本委託費で渡航費または日本滞在費を負担した場合*
日本側参加者等	11名	3名
相手国側参加者等	25名	-名

参加者リスト(様式B2)の合計人数を記入してください。該当がない箇所は「0」または「-」を記入してください。

\* 日本開催の場合は相手国側参加者等の日本での滞在費等を負担した場合、相手国開催の場合は日本側参加者等の渡航費を委託費で負担した場合に記入してください。

## 8. セミナーの概要・成果等

- (1) セミナー概要(セミナーの目的・実施状況。第三国からの参加者(基調・招待講演者等)が含まれる場合はその役割とセミナーへの効果を記載してください。関連行事(レセプション、見学(エクスカージョン)その他会合(別経費の場合はその旨を明記。))などがあれば、それも記載してください。各費目における増減が委託費総額の50%に相当する額を超える変更があった場合には、その変更理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。)

日独の最先端の免疫学研究者による議論を通じて、喫緊の課題である新型コロナウイルス感染症を始め感染症に対する免疫応答の機構解明やその制御法開発に至る道筋を見いだすことを目標として、2022年9月11日から13日にドイツゴスラー市において日独免疫ワークショップを開催した。当初の計画は、日本側からも研究室代表者に加えて若手研究者も参加するものであったが、新型コロナウイルス感染症による厳格な入国基準や航空運賃の高騰、感染した場合の各研究室への影響を鑑み、今回は日本からは研究室代表者のみが参加した。

ワークショップは、9月11日から13日にかけてゴスラー市のHotel Achtermannにおいて開催された。日本側から11名、ドイツ側からは15名の研究室主催者による口頭発表と議論に加え、ドイツ側から10名の若手研究者が参加し、口頭発表もしくはポスター発表を行った。

ゴスラー市は鉱山の町として歴史的に栄え、世界遺産に登録されている。エクスカージョンとして近郊のランメルスベルク鉱山の見学を行った(ドイツ側の経費)。

経費の大きな変更はない。

- (2) 学術的価値(セミナーにより得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本ワークショップにおいて、日独免疫学研究者間でCOVID-19を始めとした感染症に対する免疫応答や、がん免疫など多くの重要な免疫システムに関連したトピックスの様々なアイデアに関して議論をおこなった。日独の最先端の研究に関し、多くの未発表データを用いた発表があり、感染症やがんに対する免疫応答のメカニズムの基礎的な研究成果やワクチン開発への応用などに関し、様々な角度から深く議論することができた。ドイツにCOVID-19に関する研究や、がん免疫を含めた免疫機構に関する多くの研究が行われており、日本側の研究者にとってもこれらの情報を得る非常に良い機会となった。

- (3) 相手国との交流(両国の研究者が協力してセミナーを開催することによって得られた成果)

これまでも日独免疫ワークショップは継続して日本、およびドイツにおいて開催され、日独の免疫学研究者の交流や国際共同研究の推進に役立ってきた。しかし、新型コロナウイルス感染症により、国際的な往来が2年以上にわたりほぼ途絶し、オンラインのみでの交流となっていた。既に存在する基盤を用いた共同研究にはオンラインでのやり取りは便利であるが、新たな共同研究を開始したり、若手研究者同士が知り合い、より深く議論するうえでは、直接会って交流することが不可欠である。今回の日独免疫ワークショップは、新型コロナウイルス感染症により途絶した人的交流が再開し、新たな交流を生むことにも成功し、また、実際

に今後の新たな日独共同研究に関する議論も始まっている。さらに、日本免疫学会の更なる国際化にも大きく寄与した。

- (4) 社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

新型コロナウイルス感染症を始めとした感染症は現在でも大きな社会問題となっている。

本ワークショップを通じて感染症に対する免疫研究が加速し、ワクチン開発を始めとした感染症制圧における端緒となることが考えられる。また、病原体感染に対する免疫応答機構の理解は、自己免疫疾患やガンの免疫療法など免疫の関連する膨大な疾患や治療とも関わる事から、将来的に、これらの疾患や治療法開発にも貢献し、大きな社会的波及効果を生み出すことが期待される。

- (5) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

本ワークショップでは、日本側から若手主任研究者として、大阪大学の茂呂和代教授や松岡悠美准教授が参加し、発表および討論を行った。これらは日本の若手免疫研究者の国際的な Visibility を高めるためにも有効である。

ドイツ側の参加者として、ドイツの若手研究者に加えて、現在ドイツに留学している日本の若手研究者も 2 名参加しており、交流や指導を行う事ができた。

- (6) 将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

今回の日独免疫ワークショップにより、日独の最先端研究者の間での未発表データを用いた交流から新たな共同研究が生まれ、さまざまな感染症やがん、自己免疫疾患をはじめとする免疫関連疾患の病態解明や治療法の開発につながる事が期待される。本ワークショップによって日本とドイツの間での共同研究が進展し、その遂行のため若手研究者の派遣への契機となることも期待される。

また、継続的に日独免疫ワークショップによる研究交流を行い、次回には日本側もより多くの若手研究者に参加してもらい、日本の若手免疫学研究者の養成にも大きく寄与すると考えられる。

- (7) その他(上記(2)~(6) 以外に得られた成果(論文発表等含む)があれば記載してください)

なし